

追悼

荻原碌山研究者

仁科惇先生の死を悼む

仁科惇先生は施設で療養されておられましたが、令和七年八月二十一日に九十二歳でお亡くなりになりました。ご冥福をお祈りいたします。長年碌山美術館の発展にご尽力いただきました。大変感謝いたします。美術史家の先生は書籍も数多く出版され講演も多くされております。そこから先生の足跡を偲ぶことができます。

略歴

昭和八年（一九三三年）生 長野県北安曇郡池田町出身。

松本深高校卒業、信州大学文理学部前期課程修了、東北大学文学部美学美術史学科卒業、同大学院文学研究科美術史学科修士課程修了。

職歴

昭和三五年 四月 長野県屋代東高校

教諭

三七年 四月 桐朋学園女子高等学校音楽科教諭
三七年 四月 桐朋学園大学音楽学部講師（兼任、

美術

三九年 四月 桐朋大学短期大学部助教
四四年 四月 信州大学助教（教養部）
五三年 四月 信州大学教授（教養部）
六三年 八月 信州大学付属図書館長（兼任）
平成 二年 七月 退任
七年 四月 信州大学教授（繊維学部）
一一年 三月 同右 定年退官
信州大学名誉教授
一二年 四月 松商学園短期大学教授

学会及び社会に於ける活動等

昭和三三年 四月 美学会会員
平成 元年 四月 比較思想学会会員
二年 四月 (社)松本芸術文化協会美術部門審査委員長
四年 四月 豊科近代美術館協議会委員
四年 五月 (助)碌山美術館理事
五年 三月 松本市美術館構想策定委員会委員
七年 三月 同右 退任
八年 三月 豊科近代美術館協議会委員 退任
八年 四月 池田町立美術館運営協議会委員
九年 三月 松本市美術館資料選定委員会委員
一一年 三月 池田町芸術文化協会常任理事
一二年 六月 松本市文化財審議会委員
一三年 三月 (社)松本芸術文化協会



美術部門審査委員長 退任
一三年 四月 (財)碌山美術館館長(非常勤)
一六年 四月 (財)碌山美術館顧問

碌山美術館関連主な講演会

昭和五十四年十二月二日荻原守衛生誕一〇〇年記念事業『荻原守衛の人と芸術』出版記念

「碌山随想」

昭和六十三年八月二十九日 八十二文化財団

「近代女性と愛―碌山をめぐる女性たち―」

昭和六十三年八月三十日 八十二文化財団

「碌山三十二歳の生涯」

平成四年四月二十六日 碌山忌記念講演

「荻原守衛と高村光太郎」

平成十四年四月二十一日 碌山忌記念講演

「碌山の東京修行時代」

平成十五年十月十八日 碌山美術館

「アメリカ時代の碌山」

平成十六年十月十六日 碌山美術館

「パリ時代の碌山」

仁科惇先生には平成四年に碌山美術館の理事に就任いただき、平成十三年四月から松商学園短期大学教授の傍ら碌山美術館の館長に就任いただきました。

就任期間中は横澤耕四郎副館長と共に館の運営に携わっていただきました

したが、ご無理がたたり体調を崩され入院されたこともあり大変ご苦労をおかけいたしました。

仁科先生が館長に就任されたことにより昭和五十二年に出版された書籍「荻原碌山 ―その生の軌跡―」を基として荻原碌山の特別企画展「碌山ものがたりを企画開催しました」。

平成十三年夏季企画展

七月二十日(金)～九月二日(日)

「彫刻家碌山のふるさと ―荻原守衛を育てた人と自然―」

展示構成

故郷の山河

生い立ち

多感な日々 労働・勉学・病い

相馬愛蔵・黒光との出会い

井口喜源治への心酔

絵画への目覚め

離郷

その後の足跡

平成十四年春季企画展

四月十六日(火)～六月二日(日)

「碌山東京の青春 画師たらん」

とことんやってみなければ わからない

展示構成

二十歳の上京

画塾不同舎での日々

ときめき・明治女学校

いかに生きるか

未来への船出

平成十五年秋季企画展

十月四日(土)～十一月三日(月)

「碌山の海外修業 ニューヨークの画学生」

展示構成

さすらいの半年

働きながらのニューヨーク美術学校

憧れのパリ

彫刻家になるために

平成十六年秋季企画展

十月二日(土)～十一月三日(水)

「彫刻家「碌山」の誕生 ―パリ時代の萩原守衛―」

展示構成

彫刻を学ぶため再びパリへ

オランダでレンブラントを見る

アカデミー・ジュリアン彫刻室で学ぶ

留学生との交友 ヴィトリリー村

ロダンに会う

出会うまで

「私(ロダン)の弟子」

ロンドンに遊ぶ

心の病をえて 光太郎との再会

彫刻家となる

イタリア・ギリシャ・エジプトの旅

帰郷の思い ロダンとの別れ

三大古美術国の旅

児童・生徒のための 美術ものがたり

萩原碌山

は雑誌『とうげの旗』の七十五号～七十八号(平成二年～三年)に掲載されたもので仁科惇先生が信州児童文学会から転載の許可を受け小冊子にまとめたものから四の後半の《女》以降を転記したものです。

児童・生徒のための 美術ものがたり

萩原碌山

信州大学教授 仁科 惇 著

「女」の像は、彫刻として碌山の最後の作品になったものです。両手

を後ろで結んでひざまずき、顔は上に向けられて目を閉じ、唇はゆるく開かれています。自然な姿としては、これ以上は無理と言っているいい苦しいポーズです。苦しいけれど安定し、すっきりしています。両ひざがたがいくいこむような足もとから、ラセン状の動きが上へと続き、天上へ突きぬけています。そして、人体のもつふくらみとつぼまり、光と影のくり返しが作品にリズムを与えています。そういう仕組みが作品を生きた感じさせるのです。

それにしても、この「女」の姿はなんとけなげで美しいことでしょうか。あの「絶望」にうちひしがれて倒れふした女は、苦しみ、嘆き、悲しみながらついに起きあがったのです。希望を求め、自分のこだわりをのり越えようと精いっぱい体を起こしたとき、苦悩は喜びに変わり、「女」は輝いたのです。この輝きこそ、解放された自由な精神の姿であり、ほんものの美しさというものなのです。

碌山は、自分の人生をどう生きていきたいのか、自分にはどんな才能が恵まれているのか、絵とは、芸術とはなんなのか、と問い続けてきました。画家になろう、彫刻家になろうと命がけて頑張ったのは、その答えをえるための手がかりであり、画家や彫刻家になること自体が最後の目的ではなかったのです。

そしていま、「人生でもっとも尊いものは愛であり、自分をこえようとする努力こそが美しいのだ」という答えをえたのです。ですから、人間が生み出す芸術にしても、そこに愛が表されなければならぬはずなのです。

ところが、人はどうしても自分にこだわります。なにかを、だれかを愛しているつもりで、じつは自分自身を愛しています。が、いつか自分を忘れ、我が身を忘れて相手のためにつくすということがあります。そ

れが、ほんものの愛というものです。碌山は我が身を忘れ、命を削って「女」を作ったのです。「女」には碌山の命が宿り、それゆえに愛が結晶しています。

碌山は、差別された者、弱い者、とくに病人には深く同情しました。我が身を忘れてつくしました。どれだけ多くの友人、知人が彼の世話になったことでしょう。そんな碌山が、「自分がなにをしたかは問題じゃない。だいじなのは、どれだけたくさんさんの涙を流して生きたかということだ」と言っているのです。

清らかな「女」が両足ですくと立ち上がれなかったように、碌山もとうとう立ち上がれずに、数え年三十二歳で命を燃やしました。新宿中村屋で突然大量の血を吐き、明治四十三年（一九一〇）四月二十二日、あつけなくこの世を去ってしまったのです。

あれだけ恋しがった故郷に、生きている間はついに落ちつくことはできませんでしたが、いま碌山は故郷穂高の地で永遠に眠っています。しかし、その生命は、私たちがその作品や精神に接し、共感を覚えるたびによみがえり、生き続けているのです。〔終〕

作家の自己紹介 仁科 惇

日中戦争が始まって間もなく、私の母は看護婦として招集され、病院船に勤務しました。私が五歳の時のことでした。私は、母に手紙を書きたくて、それで字を覚ええました。鉛筆を握った手が、すぐ痛くなって困ったことが今でも忘れられません。

片仮名のあやしき文字に含めたる

幼なごころは母を泣かすも

その頃の母の歌のひとつです。以後、私は六年間カギツ子でした。母

は心臓を悪くして帰ってからは寝たり起きたりで、比較的若くして亡くなりました。終戦は小学校六年生の時でした。

私はいまでも、「人間の世界に正義などない」というような困った気持ちがあります。そんな私を慰めてくれた美術や音楽の世界にいつの間にか興味をもったのです。萩原碌山は、私のキリストのようなもので、今でも学び続けています。

お母様と別れた幼い頃のことは『語り継ぐ戦争絵本シリーズ』⑬『病院船 いのちの物語』郷土出版社二〇一四年発行に書かれています。

教育研究業績書

(著書)

著書、学術論文等の名称	発行、発表の年月	単著、共著の別	発行所、発表雑誌・学会
碌山萩原守衛	昭和四十二年十一月	単著	柳沢書苑
悲劇の先駆者	昭和四十四年六月	共著	学芸書林
萩原碌山 —その生の軌跡—	昭和五十二年七月	単著	柳沢書苑
相馬黒光 中村屋サロンのリーダー	昭和五十三年十一月	単著	暁教育図書
自然と結ぶ文化	昭和五十五年九月	共著	共立出版

松本の美術	昭和五十七年四月	共著	郷土出版社
碌山と安曇野	昭和五十八年	共著	世界文化社
碌山三十二歳の生涯	昭和六十二年	単著	三省堂
信州の近代化と女性	昭和六十二年十一月	共著	銀河書房
近代を開いた先駆者たち	平成四年	共著	郷土出版社
洋画の礎	平成五年十二月	共著	郷土出版社
感性工学への招待	平成八年九月	共著	森北出版
近代彫刻一〇〇年の系譜	平成八年十二月	共著	郷土出版社
碌山と信州の美術	平成十一年八月	単著	郷土出版社
碌山愛と美に生きる	平成十二年四月	共著	(財)碌山美術館
「いのち」への愛	平成十二年四月	共著	市民タイムス社
安曇野の自然と美術と観光	平成十三年三月	共著	郷土出版社
小林邦の美術	平成十三年三月	共著	「小林邦画集」刊行会

(学術論文)							
著書、学術論文等の名称	荻原守衛の人と芸術	荻原守衛の書簡について	荻原守衛書簡拾遺	相馬愛蔵	宮坂 勝	荻原守衛と中村屋サロン	近代彫刻の系譜・覚え書き
単著、共著の別	単著	単著	単著	単著	単著	単著	単著
発行、発表の年月	昭和三十六年三月	昭和三十七年三月	昭和四十八年三月	昭和六十二年一月	昭和六十二年一月	平成元年九月	平成四年三月
発行所、発表雑誌・学会	文化（東北大学文学部研究誌）第十二号	桐朋学園大学紀要第十号	信州大学教養部紀要第七号	「深志人物誌」深志人物誌刊行委員会	「深志人物誌」深志人物誌刊行委員会	「大正ロマンの輝き展」宮城県立美術館	安曇野の自然と文化の相関性についての総合的研究二

碌山のアメリカ時代	単著	平成四年九月	碌山美術館報第十号
上条俊介	単著	平成八年十二月	「深志人物誌Ⅱ」深志人物誌刊行委員会
ロタンと碌山―様式と精神の歴史に触れて―	単著	平成九年九月	「荻原守衛と日本のロタニズム展」碌山美術館
大系の芸術世界	単著	平成十年十月	郷土出版社